天理教とイスラームの出会い②

おやさと研究所講師
澤井　真　*Makoto Sawai*

イスラーム研究の整備

1930（昭和５）年、中山正善２代真柱の中国巡教を契機として、天理教の海外布教のための準備が進められた。書籍などの文物は、同年に開館した天理図書館（現天理大学附属天理図書館）に収蔵された。また民俗史料は、同年に天理外国語学校本館（現天理大学１号棟）の４階に開設された、海外事情参考品室（現天理大学附属天理参考館）に収蔵された。その後、1943（昭和 18）年に天理教亜細亜文化研究所（現天理大学附属おやさと研究所）が創設された。現在、これら３施設は天理大学の附属施設であるだけではなく、天理教の対外的な活動にも大きな役割を担っている。

イスラームに関する天理教内の学術活動として、『天理時報』に、東南アジア地域の宗教情勢が論じられた際に、「回教」の語が散見されていた。しかしながら、記録のかぎりでは、1943年７月 27 日から 29 日まで、天理図書館で開催された、共栄圏宗教講座が学術活動の嚆矢であろう。講座の第１日目には、大久保幸次（回教圏研究所長）が「共栄圏の回教」と題して講演している。大久保は、イスラームの聖典クルアーンを部分的に邦訳した最初の人物であり、戦前のイスラーム研究の権威者と呼ぶべき人物であった。[1] 大久保は、1938（昭和 13）年に設立された回教圏攷究所の所長となり、1940（昭和 15）年に改称された回教圏研究所でも所長を務めた。敗戦とともに解体される回教圏研究所であるが、戦前には、蒲生礼一、小林元、竹内好、そして井筒俊彦など、戦後のイスラーム研究や東洋学を牽引する研究者たちが在籍していた。

海外伝道という観点からも、戦前において、天理教はイスラームに大変注目していた。しかしながら、イスラームに関する教内者による本格的な記述は、筆者が確認したかぎりでは、２代真柱による文章だけである。それ以降の学術的研究は、むしろ戦後を待たなければならない。

上田嘉成とイスラーム

日本の敗戦にもかかわらず、イスラームに関心を抱き続けた天理青年たちがいた。彼らは、天理教の「復元」や天理教学の礎を築くうえで、大きな役割を果たしていくことになる、上田嘉成（1906 ～ 1985）と諸井慶徳（1914 ～ 1961）である。

上田嘉成が行ったイスラーム研究とは、天理教の「おふでさき」とイスラームのクルアーンの比較研究であった。1955（昭和 30）年、彼は、『復元』（27・28 号）に「天理教祖の世界観」を著わしている。[2] この論文は、天理教の三原典のなかでも、特に「おふでさき」に現れた天理教教祖の世界観を明らかにしようとしている。天理教の世界観を理解するうえでも、また現代哲学が取り組む問題を宗教的視点から扱っているという点でも、上田の論文は、多くの示唆を与え続ける非常に重要な研究である。

「天理教祖の世界観」には、「各種世界観との対照」という３つの論文が付されているが、その第１章が「コーランに於ける世界観の考察」であった。「序言」において、上田は次のように論じている。

> 「おふでさき」の世界観と各種の世界観とを比較対照することは、「おふでさき」の世界観をより鮮明に理解する上に有用であると共に、宗教学の労作としても、比較教理学の分野に向う努力として、興味ある事と思う。[3]

ここで上田が用いた「比較教理学」とは、戦後の日本の宗教学を牽引した岸本英夫の言葉の引用である。比較教理学とは、各宗教に見られる教理の客観的な比較研究であるという意味で、「比較宗教学」（comparative study of religion）であった。そして、上田は、天理教とイスラームの世界観に関する比較研究を試みたのであった。

「おふでさき」をはじめとする天理教の三原典や、イスラームにおける「クルアーン」は、宗教学的にみれば「聖典」と呼ばれる。神の言葉を記した聖典は、宗教的信仰の根幹を成している。「天理教祖の世界観」において、上田は、「おふでさき」における「世界」や「よ」(世) などの語に注目した。そのうえで、「コーランに於ける世界観の考察」においても、彼はクルアーンに見られる「世界」や世界観を考察する。それは、イスラームの世界観を理解することを通して、天理教の世界観をより掘り下げて学び、理解するためであった。

天理教とイスラームの「世界」を比較する

上田は、クルアーンの世界観を考察するために、大久保幸次のクルアーンの邦訳や、イスラーム研究で長らく用いられてきた、ジョージ・セール（George Sale, 1697 ～ 1736）のクルアーン英訳書を用いている。彼が指摘するように、クルアーンでは、「現世」や「来世」という語が頻繁に登場する。もちろん、クルアーンは来世に強調点を置いており、現世は「空しき戯れ」に過ぎない、と上田は表現する。

こうしたクルアーンの「世界」概念に対して、上田は天理教の信仰を以下のように説明する。

> 天理教の信仰に於ては、世界は一つしかない。この地上、この宇宙こそ、唯一つの世界である。但し来生は有るが、同じこの世に更生して来る。[4]

天理教では、「出直し」という語で死が説明されるように、人間は、我々が住む現世という一つの世界で、何度も生まれ変わりを経る。それに対して、クルアーンは、その基調として現世と来世というコントラストを通して、世界が描写される。そこで描かれた「世界」とは、終末における審判の後に拡がる天国と地獄という「世界」である。

「世界」という視点から、上田はイスラームの世界観を考察し、天理教の世界観の特質を明らかにしようとした。この意味で、彼のクルアーン研究は、比較宗教学に根ざしていた。また、信仰に基づく教理理解という意味では、キリスト教神学で言う比較神学（comparative theology）の水準にもあった。上田のクルアーン研究は、彼自身が生涯をかけて目指した天理教教祖の面影や原典研究と通底していたのである。

［参考文献］
（１）大澤広嗣「昭和前期におけるイスラーム研究―回教圏研究所と大久保幸次」、『宗教研究』（78 巻２号）、2004 年。
（２）この論文は、その後、1968（昭和 43）年に『天理教祖の世界観』として出版されている。
（３）上田嘉成「各種世界観との対照」、『復元』（28 号）、３頁。
（４）同上、８頁。